

大垣市金生山化石館

化石館だより



コラム

美濃赤坂の大理石細工



谷鼎翁の石碑

金生山化石館の西隣に金生山神社があります。この神社は、明治維新後の神仏分離でこの場所に移されたもので、元は蔵王権現といい山頂の明星輪寺境内に祭られていました。境内の一隅には、大理石細工の祖として崇められている谷鼎翁の石碑がひっそりと佇んでいます。金生山の大理石細工は、今では風前の灯となってしまいましたが、かつては全国にその名を馳せており、建築用大理石業、石灰産業と共に赤坂の町を支える重要な産業でした。谷鼎翁の石碑は、今ではその存在を知る人すら少なくなり、神社に来られる方々もほとんどが足を止めることなく素通りされています。因みに、谷鼎のお墓は麓の妙法寺境内に安置されています。

谷鼎は江戸時代の末期、天保の頃、金生山山麓の市橋村に住み、父親の谷理九郎とともに庭師を本業としていました。その頃村人たちの中に、中山道を通る旅人相手に金生山の美しい石を用いた根付や風鎮を商うことが行われており、手先の器用な彼はこれに

目を付け、硯や文鎮等に動物や植物を彫刻して注目を集めました。彼は弟子を抱え、大理石細工を扱う店を開き、次第に大理石細工を本業としていきました。

谷鼎はまた雲根堂、鏝石亭などと号し、奇石珍石を収集する趣味もありました。同好の仲間も多数あり、「雲根誌」を著した近江の木内石亭とも親交がありました。石亭は、谷鼎の収集品について、「五百余種の奇石、最上の鏝石を五百品も所有している」などと高く評価しています。金生山の化石や大理石はこの頃から採集されていたのです。当時は風化により化石が石灰岩表面に浮き出した見事な石が多数あったと思われます。また、方解石や赤鉄鉱、黄銅鉱をはじめ石脂、蛇含石、兔余糧、寒水石、舍利石、蛭石、盆石、三稜石金剛などとよばれた多彩な石が採集できたようです。

鼎は、小さな細工物だけでなく、灯笼、石臼、手鉢などの大型の製品も手掛けています。まだ現地で実物を確認していませんが、京都の北野天満宮や東寺に、金生山の更紗石を用い、谷鼎の名が刻まれた石灯笼があるようです。なお北野天満宮には、明治41年に奉納された二体の臥牛が大切に祀られていま



す。黒牛は馬淵弥三郎の作で美濃黒を用いています。もう一体は馬淵弥兵衛の作で更紗石を用いて作られています。

明治維新直後の明治 6 年にはオーストリアのウイーンで万国博覧会が開催されており、明治政府はこれに参加しました。この博覧会には、様々なものが出品されましたが、その中に大理石細工もありました。東京国立文化財研究所編の出品目録を見てみると、赤坂のものが大半を占めています。このことから当時日本一の産地であったことがうかがわれます。

目録には、美濃国清水甚七・馬淵喜七と作家名が書かれているものが 39 点、他に美濃国赤坂とのみ書かれているものが 18 点ありました。ギュンベルがパラフズリナ・ジャポニカを発見したのは、この時出品された作品からでした。石材には五色斑石、黒石、白石、白黒斑石など見た目による名前がつけられています。フズリナの入った石は鮫石と呼ばれていました。それで石材名が鮫石となっている作品を調べてみると、花活けが 2 点、石菖鉢が 3 点、置物台が 4 点、文鎮が 1 点ありました。この中にギュンベルが手にした作品がきっとあるはずですが、どれであったのかは明らかになっていません。

明治になり中山道を往来する旅人がいなくなると、一時的に赤坂の石細工は衰退します。しかし、明治 10 年に開かれた第一回勸業博覧会やその後の博覧会に優れた作品を出品して名声を取り戻し、明治末から大正にかけて全盛期を迎えました。

(文責：高木洋一)

参考：貝沼喜久雄 (1995) 金生山賛歌

金生山化石研究会 (1981) 金生山 その文化と自然 他

お知らせ

化石講演会

2月11日(日曜・祝日) 午後1時30分から 大垣市サイトピアセンターで開催します。

演題： 多様な化石ザメたち ～金生山にもサメがいた！～

講師： 高桑祐司 先生 (群馬県立自然史博物館 学芸係主幹 (学芸員))

入場は無料です。 事前申し込みも不要です。直接会場へお出かけください。

問い合わせ： 大垣市金生山化石館 電話 (0584) 71-0950 (ファックスも同じ)

Email kasekikan@vanilla.ocn.ne.jp